

# 日中感情オノマトペの使用実態から見る反復形の相違について

孫 逸

キーワード：オノマトペ、日中対照、使用実態、反復形

## 要 旨

本稿は日中両言語における感情を表すオノマトペを研究するため、「笑い」と「泣き」を表すオノマトペを対象にし、日中コーパスを利用して、日中オノマトペの使用上の相違点を明らかにするものである。また、日中オノマトペの使用実態を対象にした上で、日中感情オノマトペにおける反復形の相違点についても検討を試みる。考察した結果として、以下の2点を明らかにした。まず、使用実態について、日本語は擬音語の語数が多いが、実際に使用する時は擬態語のほうが多く使われているのに対し、中国語は擬音語の語数も多くて、実際の使用も多く見られることが確認できた。さらに、日中感情オノマトペの反復形の相違について、日本語も、中国語も、反復形が感情オノマトペに多く見られるため、反復形は日中感情オノマトペの代表的な語構成法と考えられる。一方、日本語感情オノマトペにおける反復形は、「生産的な反復形」と言えるのに対し、中国語感情オノマトペにおける反復形は、「語彙的な反復形」と考えられる。

## 1. はじめに

オノマトペは、豊富な表現力を持っており、生き生きとした臨場感を与えられる語彙であると言える。日本語と中国語にはどちらにもオノマトペが存在しているが、両言語におけるオノマトペの定義と範囲（2節にて詳述）、その語数や使用率（2節にて詳述）などについては相違がある。

「笑い」や「泣き」という行為は基本的な感情表現であり、日常的によく使われる表現のうちのひとつであると考えられる。『日本語オノマトペ辞典:擬音語・擬態語 4500』(2007)には、「笑い」と「泣き」に関するオノマトペがそれぞれ、74語と46語挙げられており、語数から見るとかなり多いと言える。また、中国語にも“嘻嘻”“哈哈”や“呜呜”などのオノマトペの使用が数多く見られる。そのため、「笑い」や「泣き」を中心に扱った日中オノマトペの対照研究は、日中感情オノマトペ全体の状況を把握する手がかりと考えられる。

本研究は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下はBCCWJと称する)と『現代汉语語料庫』(以下はCCLと称する)を利用し、日本語と中国語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの使用実態を調査する。そして、調査結果に基づいて、日中両言語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの使用実態の相違点を明らかにし、オノマトペの代表的な語構成法と思われる反復形について、日中両言語における相違点を検討する。

以下の第2節では先行研究について概観し、問題点を述べる。第3節は研究対象の抽出方法と調査方法について述べる。第4節は日中感情オノマトペのコーパスでの使用状況を明らかにし、第5章は反復形を中心にして、日中オノマトペの相違点を示す。第6章は全体のまとめを行う。

## 2. 先行研究

### 2.1 オノマトペの定義について

日本語におけるオノマトペの定義は、中国語におけるオノマトペのそれとは異なっている。

まず、日本語オノマトペの定義と範囲について、小野(2007)は、オノマトペは、いわゆる擬音語と擬態語の総称であると述べている。金田一(1976)は語彙的な意味の観点からオノマトペを五種類に分類した。金田一(1976)の分類から、オノマトペは主に「擬音語」と「擬態語」に分類され、「擬声語」は「擬音語」の下位分類であることを確認できた。飛田・浅田(2022)と浅野(2003)においてもオノマトペについて定義した。各研究者の定義から、日本語において、オノマトペは主に擬音語と擬態語に分けられていると考えている研究者は少なくないと言える。擬音語と擬態語の区別は、「音」を表現したものか、「様子」を表現したものか、というところである。

一方、中国語におけるオノマトペの定義は研究者によってことなっている。耿(1986)は、オノマトペに相当する語を“擬声詞”と呼び、その定義については、“拟声词”（又叫象声词）是模拟自然声音的词。它们是拟声造词法的一个产儿，以其专门摹拟现实物质的各种声音而自成体系」「（“擬声詞”（また“象声詞”）が、自然界の音声を模倣する言葉である。それらは、造語法によって生じたものであり、自然界の音を模倣することで独自に系統となっている。一筆者訳）」と述べている。耿(1986)は、中国語の“擬声詞”（また“象声詞”）は「擬音語」だけに相当すると指摘している。それに対し、野口(1995)は、中国語で擬音語にあたる語は“象声词”（象声詞）または“拟声词”（擬声詞）であると指摘し、擬態語にあたる言葉は中国語の文法用語には特にならうだが、用語がないからといって擬態語自体がないわけではなく、“热乎乎”（ほかほかしている）“滑溜溜”（つるつるしている）などの後置成分をおく形容詞、いわゆる ABB 型形容詞は一種の擬態語と考えられると述べている。すなわち、中国語におけるオノマトペの定義と範囲は、まだ定着していない部分が見られる。

## 2.2 オノマトペの反復形について

日本語オノマトペの音韻・形態上の特徴について、玉村(1979)では、『分類語彙表』を利用して日本語オノマトペの形式的特徴をまとめ、割合で各型を記述した。玉村(1979)によると、日本語オノマトペの中で「ABAB」型は約 45.26%（XYXY 型は 42.86%、XVXV 型は 2.40%）を占めており、圧倒的に多い。また、「り」型は約 26.93%（XっYり型は 12.77%、XYり型は 12.01%、XんYりは 2.15%）を占めている。玉村(1979)の調査によると、日本語オノマトペの形式の種類が多いことが読み取れ、「ABAB」型が圧倒的に多いことがわかったが、反復形を持っているオノマトペは「ABAB」型以外にも存在しているため、反復形オノマトペが全体にどのような割合を持っているのかについては、さらに検討する必要があるとされている。

田守・スコーラップ(1999)では、オノマトペはその形態の面から他の語彙と区別され得るといふ考え方をとるとき、主に 6 つの要素がオノマトペを特徴づける上で特に重要であると指摘されており、その中、反復形はオノマトペの 1 つの重要な特徴であると述べている。しかし、玉村(1979)と田守・スコーラップ(1999)も、反復形は日本語オノマトペに多く見られる特徴と指摘しているが、他の語形と比べると、どのような割合を持っているのかについては、明確にしていない。

一方、中国語オノマトペについて、耿(1986)は、形態的観点から、中国語のオノマトペを以下のように 11 種類に大別している。

- ①A 式(单音)：刷，嘞，哇，啞，咩……
- ②AA 式(叠音)：咯咯，吱吱，啾啾，唏唏……
- ③AB 式(双音)：咯嘞，银铛，忽隆，跨喳
- ④AAB 式：叮叮当，叮叮咚，咚咚呛，噼噼啪，提提嗒……
- ⑤ABB 式：哗啦啦，呱呱哒，扑通通，滴溜溜，扑簌簌……
- ⑥ABBB 式：哗啦啦啦，轰隆隆隆，咕噜噜噜，扑棱棱棱……
- ⑦AABB 式(重叠音)：叽叽喳喳，吱吱嘎嘎，窸窣窸窣，叮叮当当……
- ⑧ABCB 式：噼嗒啪嗒，嘟噜咕噜，噼通扑通……
- ⑨A 里 BC 式：稀里轰隆，叽里呱呱，稀里哗啦，噼里啪啦……
- ⑩A 里 AC 式：呼哩呼噜，哇哩哇啦……
- ⑪ABCD 式：丁零当啷，乒零乒啷，叮铃咚隆……

耿(1986)は、中国語のオノマトペにおいて、各語形が音韻上どのような特徴があるかについて、例をあげながら説明をしている。しかし、各語形がどのような割合をしているか、その中代表的な語形が何かについては、言及していない。

### 2.3 問題点

先行研究を見ると、中国語オノマトペの定義と範疇が明確になっていないことが確認された。日本語オノマトペの定義の定着しているのに対して、中国語オノマトペの定義は未だ定着していない。中国語オノマトペの定義が明確になっていないことに起因してその範疇の規定も困難となり、文法的研究の停滞を招いてきた。そのため、中国語オノマトペの範疇を明確にしてからその用法を考察する必要がある。

また、反復形は日中オノマトペにおいて代表的な語形特徴と思われ、両言語に多く見られるが、反復形は日中オノマトペにとってはどのような役割を持っているか、具体的にどのような相違点があるか、という点については、調査に基づいて明らかにする必要はある。

次節以降では、日中感情オノマトペの使用実態と反復形という2つの部分の検討を通じて、これらの点について考察を行う。

### 3. 調査方法と研究対象の抽出

本稿では、主に以下の日中コーパスと辞書を利用して研究対象を抽出し、考察を行う。

- ・コーパス

日本語：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）

中国語：『現代汉语语料庫』（CCL）

- ・辞書

日本語：『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』（小学館）

中国語：《現代汉语词典》（商务印书馆）

本稿では、コーパスと辞書を利用して「笑い」「泣き」に関する日本語オノマトペを抽出することとなる。まず、日本語側の研究対象を抽出する方法を述べる。コーパスで日本語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペを抽出する際に、動詞の「笑う」と「泣く」と共起するオノマトペを検索した。そのコーパスで抽出したオノマトペと、『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』における「感情・感覚に関するオノマトペ」-【笑う】【泣く】の部分で取り上げられているオノマトペと、2つの結果を合わせ、重複しているオノマトペを除去してから、研究対象とする。以上の手順で、日本語側で研究対象となる「笑い」と「泣き」に関するオノマトペはそれぞれ 85 語と 59 語となる。

また、中国語側の研究対象を抽出する際にも、コーパスと辞書を合わせて行った。中国語コーパス『CCL』で動詞の“笑”と“哭”と共起するオノマトペを抽出した。さらに、辞書《現代汉语词典》で「笑う声」「笑う様子」や「泣く声」「泣く様子」と記入されている語を抽出した。その2つの抽出した結果を合わせ、重複しているオノマトペを除去して、中国語側で研究対象となる「笑い」と「泣き」に関するオノマトペである。その語数はそれぞれ 27 語と 35 語となる。

以上のように、日本語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペと、中国語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペをそれぞれ抽出し、研究対象として考察を行なっていく。

#### 4. 日中感情オノマトペの使用実態

『日本語オノマトペ辞典：擬音語・擬態語 4500』の内容を参照したところ、以下のよう語積が見られた。

- (1) a. おほほ：【声・さま】口をすぼめて軽く笑う声。上品に、または気どって笑うさま。
- b. からから：【声・さま】高く笑う声。屈託無く笑うさま。
- c. ははは：【声・さま】屈託無く快活に笑う声。また、そのさま。
- d. にこにこ：【さま】嬉しそうに笑みを浮かべ続けるさま。
- e. にっこり：①【さま】明るい表情で笑うさま。  
②【さま】和やかなさま。心地よいさま。

(1) のような語積から、日本語における「笑い」に関するオノマトペは、【声・さま】と【さま】という二種類に分けられる。いわゆる、前者は「擬音語」「擬態語」の性質を両方持っている語であり、後者は「擬態語」の性質だけを持っている語である。その分類を参照し、【声・さま】と分類されるオノマトペを①擬音語グループに入れて、【さま】と分類されるオノマトペを②擬態語グループに入れることにして、各グループの語数とコーパスでの実際の用例数を調査した。日本語側の擬音語と擬態語の調査結果は以下ようになる。

##### ・日本語側

##### A. 「笑い」に関するオノマトペ

①擬音語	60 語	4077 例
②擬態語	25 語	5055 例

##### B. 「泣き」に関するオノマトペ

①擬音語	33 語	4077 例
②擬態語	26 語	5055 例

また、『現代汉语词典』（2012）の語積を参照したところ、中国語の「笑い」に関するオノマトペの意味は、以下ようになる。

- (2) a. 哈哈：(拟声)模拟大声的声音。（筆者訳：（擬声）大笑いの声を真似する語）  
b. 嘿嘿：(拟声)模拟笑声(多叠用)。（筆者訳：（擬声）笑い声を真似する語（疊語が多用される））  
c. 噗嗤：(拟声)模拟忍不住突然发出的笑声。（筆者訳：（擬声）突然の笑い声を真似する語）
- (3) a. 笑哈哈：形容张口大笑的样子。（筆者訳：口を開けて笑う様子）  
b. 笑呵呵：形容由于内心喜悦而发笑的样子。（筆者訳：心からの喜びで笑う様子）  
c. 笑咪咪：形容微笑时眯起眼睛的样子。（筆者訳：目を細めて微笑する様子）

(2) (3) の解釈を見れば分かるように、《現代汉语词典》には、オノマトペの意味解釈に“拟声（訳：擬声）”や“样子（訳：様子）”のようになっている。そこから、音か様子かの区別が付けられているため、それをもとに、「笑い」に関するオノマトペを①擬音語と②擬態語に分ける。《現代汉语词典》を参照し、中国語オノマトペを①擬音語と②擬態語という2つのグループに分け、各グループの語数とコーパスでの実際の用例数を調査した。中国語側の擬音語と擬態語の調査結果は以下のようになる。

・中国語側

A. 「笑い」に関するオノマトペ

①擬音語	16 語	11887 例
②擬態語	11 語	3116 例

B. 「泣き」に関するオノマトペ

①擬音語	17 語	2782 例
②擬態語	18 語	1235 例

以上のように、日中両言語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの実態調査を調査した。日本語側と中国語側の結果を合わせ、表1のように示す。

表1 日中両言語における感情オノマトペの使用実態

		語数	擬音語/ 擬態語	語数	使用率	語数の比率と使用 率の増減状況
日本語	笑い	85	擬音語	<b>70.6%</b>	<b>55.4%</b>	↓↓激減
			擬態語	29.4%	44.6%	↑↑激増
	泣き	59	擬音語	<b>55.9%</b>	<b>57.4%</b>	↑微増
			擬態語	44.1%	42.6%	↓微減
中国語	笑い	26	擬音語	<b>57.5%</b>	<b>79.2%</b>	↑↑激増
			擬態語	42.3%	20.8%	↓↓激減
	泣き	35	擬音語	48.6%	<b>69.2%</b>	↑↑激増
			擬態語	<b>51.4%</b>	30.8%	↓↓激減

表1を見ると、日中両語における「笑い」や「泣き」に関するオノマトペは、語数的にみれば、2つの特徴が見られる。

①日本語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの語数は、いずれも、中国語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペより多い。すなわち、日本語オノマトペの数が中国語より遥かに多いと考えられる。

②日本語における「笑い」に関するオノマトペの語数は「泣き」に関するオノマトペの語数より多いのに対し、中国語における「笑い」に関するオノマトペの語数は「泣き」に関するオノマトペの語数より少ない。すなわち、日本語には「笑い」に関するオノマトペが豊富であるのに対し、中国語には「泣き」に関するオノマトペの方が豊富であると言えるだろう。

また、日中両言語における「笑い」や「泣き」に関するオノマトペの使用上の相違点については、主に以下の2点にまとめられる。

①日本語においても、中国語においても、「擬音語」の方が語数が多くて、使用率が高い。

②日本語オノマトペの使用は、擬態語の方が多用される傾向が見られる。一方、中国語オノマトペの使用は、擬音語の方が多用される傾向が見られる。

まず、表1は、擬音語と擬態語の中で語数・使用率が高い方を太字で表している。語数の欄を見ると、中国語の「泣き」に関するオノマトペだけが、擬態語の語数が擬音語より少し多くなっているが、それ以外は全部擬音語の語数がより高い比率を占めている。また、使用率から見ても、日本語中国語を問わずに、全部擬音語の方が比率が高くて、5割以上となっている。もちろん使用率は語の数に影響を受ける可能性があると思われるが、語数の比率も使用率も高くなっていることによって、「擬音語」の方が語数が高くて使用率も高いと言えるだろう。

一方、語数の比率と其の使用率の変化を見れば、擬音語と擬態語の使用傾向が見えてくると考えられる。語数の比率と使用率の増減状況という欄に各擬音語擬態語の増減状況を明記している。日本語の「笑い」に関するオノマトペは、擬音語の語数が70.6%を占めているが、その実際の使用率が55.4%に下がり、激減の変化が見られる。それに対し、語数は29.4%しか占めない擬態語が、使用率が44.6%に上がり、激増の変化が見られる。また、「泣き」に関するオノマトペの語数の比率と使用率が、2%以内の変化しか見られないため、使用傾向の判断にはなりにくいと考えられる。以上から、日本語における感情を表すオノマトペは、「擬態語」の方が多く使用されている傾向が見られる。

日本語側と逆に、中国語側には、擬音語が語数の比率から使用率へ激増の変化が見られ、擬態語が語数の比率から使用率へ激減となっている。中国語における「笑い」に関するオノマトペも、「泣き」に関するオノマトペも、語自体の数が少なくない上に、その使用率もより一層高く上がっている。そこから、中国語における感情を表すオノマトペは、「擬音語」の方が多用されている傾向が見られる。

## 5. 日中オノマトペの反復形

### 5.1 日中オノマトペにおける反復形

中国語オノマトペといえば、反復形が典型的な特徴と言われるが、本節はそれを検証するために、研究対象の「笑い」「泣き」に関するオノマトペについて調査を行なっていく。日中オノマトペにおける語形上のバリエーションと、各語形の割合を調査することを通して、日中オノマトペの形態的な特徴をそれぞれ見ていく。ここでは、中国語のオノマトペの語形が反復形に偏るのに対し、日本語では反復形以外に、「〜っ」型または「〜り」型のような語形上のバリエーションも存在していることを示す。

日本語オノマトペの形態的特徴について、田守・スコラップ(1999)は、オノマトペの形態的・音韻的特徴としては、「り語尾」、促音の挿入と語末の付加、発音の語末の付加、語幹からの反復形などの点が挙げられると指摘している。これはオノマトペ全体の特徴とみられるが、擬音語と擬態語を分けて、それぞれどのような特徴があるかについては、説明が足りない。また、中国語オノマトペ(象声詞)の形態的特徴について、耿(1986)と野口(1995)は、それぞれ10種類と11種類に分けている。しかし、従来の中国語オノマトペの定義と範囲は研究者によって異なり、擬態語がその分類に含まれていない可能性も考えられる。そのため、擬音語と擬態語を分けて、それぞれどのような特徴があるかについては、あらためて検討する必要がある。

まず、日本語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペを擬音語と擬態語に分けて、語形上の特徴を検討していく。

・擬音語 (93 語)

完全反復形 (AAA, ABAB, ABCABC)	60 語/64.5%
半反復形 (ABB)	12 語/12.9%
～っ	12 語/12.9%
その他	9 語/9.7%

・擬態語 (51 語)

完全反復形 (ABAB, ABCABC)	25 語/49.0%
～っ	10 語/20.0%
～り	9 語/17.6%
その他	7 語/13.7%

日本語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペの語形を分けて、各語形の語数を計算した結果、擬音語においては完全反復形を持つ語は 64.5%を占めており、反復形を持つ語は 12.9%を占めている。つまり、擬音語においては、反復形(完全反復形+反復形)を持つ語が合計 77.4%となり、極めて大きな割合を占めていることが言える。

また、擬態語の場合は、反復形が完全反復形類型しかみられなく、全体の擬態語の 49%を占めている。擬態語において反復形を持つ語の割合は擬音語ほど極めて高いとは言えないが、「～っ」型または「～り」型と比べると、遙かな差が読み取れる。つま

り、擬態語においては、「～っ」型と「～り」型以外、反復形を持つ語も数多く存在している。

以上から、日本語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペを、擬音語と擬態語に分けてそれぞれの語形上の割合について検討した結果、「～っ」型は擬音語と擬態語といずれにおいても現れたが、「～り」型は擬態語の特有な語形として現れている。また、反復形をしている語は、擬音語、擬態語を問わず、その中に極めて高い割合で現れている。すなわち、反復という語形構成法は、日本語における感情を表すオノマトペにおいて最も使用されている語構成法と考えても良いだろう。

次は、中国語における「笑い」「泣き」に関するオノマトペを擬音語と擬態語に分けて、語形上の特徴を検討していく。

・擬音語 (32 語)

完全反復形 (AA, ABAB, AABB)	26 語/81.2%
その他	6 語/18.8%

・擬態語 (29 語)

完全反復形 (AA, AABB)	9 語/31.0%
半反復形 (ABB)	19 語/65.5%
その他	1 語/3.5%

中国語の場合も、擬音語と擬態語において現れた語形を分けて、各語形の語数とその割合を計算した。中国語の語形類型はより単純で、反復形とその他に分けられる。具体的な数値を見ると、擬音語においては完全反復形を持つ語は 26 語で、極めて高い割合の 81.2%を占めている。つまり、中国語の擬音語においては、反復形を持つ語が極めて数多く存在している。

また、擬態語の場合、完全反復形を持つ語が 31.0%を占め、半反復形として扱う ABB 型は、最も高い割合の 65.5%となっている。それ以外、その他の形を持つ語は 1 語しかない。そこから、中国語の擬態語においても、その擬音語と同様に、反復形を持つ語が圧倒的な数となっており、合計 96.5%を占めていることがわかる。すなわち、中国語の場合、オノマトペの語形上のバリエーションはより単純で、擬音語、擬態語を問わず、反復という語構成法は、その語構成の代表的な語構成法と考えられる。

以上、日本語と中国語の語形類型を擬音語・擬態語に分けて考察した。そこから、日本語の語形のバリエーションが、中国語より多くみられることが確認できる。特に日本語の擬態語には、反復形以外に、「～っ」型と「～り」型も見られ、バリエーションが多いと言える。一方、反復という語構成法が、擬音語においても、擬態語においても、最も代表的な語構成方法として使用されている点は、日中両言語とも見られた共通点である。

## 5.2 反復形の生産性について

反復形は日中オノマトペにおいては数多く見られ、オノマトペの語構成にとっては、代表的な特徴と言えるが、日本語オノマトペにおける反復形と、中国語オノマトペにおける反復形とは、それぞれの言語体系の下で見ると、各自の語構成にとってはどのような機能と意味を持っているのかについて検討していく。ここでは、日本語と中国語のオノマトペにおいては反復形をしている語が数多いが、日本語における反復形は生産的な反復形であるのに対し、中国語における反復形は語彙的な反復形であることを示す。

まず、日本語のオノマトペにおける反復形と非反復形の例を挙げて検討を行なっていきたい。

### ・日本語

#### 完全反復形

AAA 型	ははは	ふふふ	へへへ
ABAB 型	あはあは	げらげら	にこにこ
	しくしく	はらはら	めそめそ
ABCABC 型	えへらえへら	くすりくすり	うえんうえん

#### 半反復形

ABB 型	わはは	えへへ	ぎゃはは
-------	-----	-----	------

#### 非反復形

～っ型	どっ	にかっ	わっ	げたっ
～り型	にこり	にんまり	ぼろり	

以上で挙げられた各語形の語を見ると、日本語オノマトペの語構成について、3つのことがまとめられる。まず、完全反復形の各型は、語構成の面から見ると、語基から一回以上の繰り返しをして完全反復形の語となる。完全反復形は、擬音語において観察できることもあれば、擬態語において観察できることもある。また、語基とその反復形は、意味的には関連性がある、ペアとなっていることが見られる。

次に、半反復形として扱う ABB 型は、基本的には擬音語にしか見られない。すなわち、半反復形という語構成方法が日本語においては、音を真似する語を構成する時に多く使われている。さらに、反復形のほかに、非反復形もあって、その中には「～っ」型と「～り」型があるが、語構成の面から見れば、それらも1つの語基から「っ」や「り」をつけることで、生産的なオノマトペになる。以上から、日本語オノマトペには反復形以外に、他の語形のバリエーションもあるが、語構成の面から、どちらの語形のオノマトペも、基本的には1つの語基から派生したと思われるため、日本語のオノマトペの語構成は生産性が高いと言える。また、日本語オノマトペの反復形とその語基がペアとなっていることから、日本語オノマトペの反復形は生産性が高いと認められ、日本語オノマトペの反復形は生産的な反復形であると言えるだろう。

次は中国語のオノマトペにおける反復形と非反復形の例を挙げて検討を行なっていきたい。

・ 中国語

完全反復形

AA	哈哈 嘿嘿 呜呜
ABAB	哇啦哇啦 哇呀哇呀 呼哧呼哧
AABB	嘻嘻哈哈 哭哭啼啼 抽抽嗒嗒

半反復形

ABB	笑眯眯 扑簌簌 泪汪汪
-----	-------------

非反復形

ABCD	稀里哗啦
------	------

以上で挙げられた各語形をしている中国語オノマトペを見ると、中国語オノマトペの語構成については、3つのことがまとめられる。まず、完全反復形には、日本語と

同じような「ABAB型」のほか、独自の繰り返し方をしている「AABB型」の語もある。「ABAB型」は日本語と同様に、語基のABから一回繰り返してから成り立ったのに対し、AABB型は、語基のABを分けてそれぞれ一回繰り返してから成り立った。例えば、「哇啦哇啦」はその語基と考えられる“哇啦”の繰り返し、“呼哧呼哧”は“呼哧”の繰り返しによって成り立った語で、語基の“哇啦”や“呼哧”は、元々擬音語として使われることができ、意味を持つ語と認められる。それに対し、“嘻嘻哈哈”と“哭哭啼啼”も、語基の“嘻嘻”と“哭啼”から派生した語であるが、その語基からの繰り返し方としては、語基の“嘻嘻”や“哭啼”を分けて、それぞれを一回反復することにより、完全反復形の「AABB型」になるわけである。その語基と考えられる語のもともとの用法は、擬音語の他に、動詞として使われる語も見られる。

次に、半反復形のABB型は中国語においてもあるが、日本語では擬音語の方がこのABB型をしているのに対し、中国語では擬態語の方がABB型をしている。具体的に見ると、中国語には“笑咪咪”や“泪汪汪”、または“扑簌簌”のようなABB型を見ると、その語構成は「A+BB」という形で理解でき、BBはAを修飾する関係になっている。

最後に、非反復形について、今回の考察対象である「笑い」と「泣き」に関するオノマトペには、“A里BC”という一種類しかないが、他には“A”のような単独な1音節語と、“AB”のような2音節語という類型も考えられる。日本語においては、非反復形と反復形とは同じ語基から生産されたケースが広く見られ、お互いに関連性が深くて生産性が高いのに対し、中国語の場合、非反復形と反復形との間に関連性が見られにくいため、生産性が低い。すなわち、日中両言語のオノマトペにおいて、反復形が多く存在しているが、日本語の反復形は非反復形とペアになっているケースが広く見られ、生産的な反復形と考えられるのに対し、中国語の反復形は非反復形との関連性が薄くて、ペアになりにくいため、語彙内に限られている語彙的な反復形と言える。

## 6. おわりに

本稿は、日中両言語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの使用実態を調査し、日中オノマトペで多く見られる反復形の相違点について検討を行った。コーパスにおける使用実態から、日本語における感情オノマトペは擬音語の語数が多いが、実際の使用には擬態語が多く使用される傾向が見られる。それに対し、中国語におけ

る感情オノマトペは擬音語の方が多く使用される傾向が見られる。また、反復形は、日本語感情オノマトペにおいても、中国語感情オノマトペにおいても、数多く見られるため、日中オノマトペの代表的な語構成法と考えられる。しかし、日本語感情オノマトペにおける反復形は「生産的な反復形」であるのに対し、中国語感情オノマトペにおける反復形は「語彙的な反復形」と考えられ、日本語の反復形より生産性が低いと言える。

本稿では、コーパスを利用して、日中両言語における「笑い」と「泣き」に関するオノマトペの使用実態を考察した上、両言語のオノマトペに多く見られる反復形についての相違点を考察した。オノマトペの日中翻訳などについての考察は、今後の課題にしたい。

#### 参考文献

- 小野正弘 (2007) 『日本語オノマトペ辞典:擬音語・擬態語 4500』,東京:小学館.
- 角岡賢一 (2007) 『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』,くろしお出版.
- 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』,むぎ書房.
- 玉村文郎 (1979) 「日本語と中国語における音象徴語」『大谷女子大学国文』9号(大河内康憲編 1992『日本語と中国語の対照研究論文集』,377-389,くろしお出版所収) .
- 田守育啓・ローレンス スコーラップ (1999) 『オノマトペー形態と意味』(日英語対照研究シリーズ6),くろしお出版.
- 田守育啓 (2002) 『オノマトペ擬音語・擬態語を楽しむ』,岩波書店.
- 中国社会科学院语言研究所 (2012) 《现代汉语词典》,商务印书馆
- 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語・擬態語用法辞典』東京堂書店.
- 野口宗親 (1995) 『中国語擬音語辞典』,東方書店.
- 耿二岭 (1986) 《汉语拟声词》,湖北教育出版社.

#### コーパス

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) 日本国立国語研究所

『現代汉语语料庫』(CCL) 北京大学中国语言学研究中心

ソーン イツ／人文社会科学研究所

(2022年11月11日受理)